
月夜の宴

市丸乱菊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜の宴

【Nコード】

N7622H

【作者名】

市丸乱菊

【あらすじ】

夜道を散歩する市丸ギン。そこにやってきたのは幼馴染の松本乱菊。そして二人は……

「夜道をこつやつてのんびり歩くのもええもんやなあ・・・」

市丸は星空を見上げた。

眩いばかりの宝石が夜空を彩る。

河沿いなので蛍も飛んでいた。

もうそんな季節やねんなあ・・・
今何してんのやろか・・・
君は・・・

ふと、一人の女性の姿を思った。

乱菊・・・

いつもの口の笑みが消える。

「あかんあかん・・・そんなこと考えてたら・・・」

さらさらの頭を掻き篋る。

乱菊が藍染隊長に何されるかわからへん．．．．．

なんも考えたらあかん．．．．．

自分の感情を押し殺す。

ふっ．．

と笑みが戻った。

「さあて．．．帰ろう。」

パタパタ．．

足音??

さつと闇に身を潜め神鎗を構える。

．．．．．

「あつれ．．ここに誰かいたような気がするんだけどなあ．．．．．」

かわいい乱菊さんと蛭ちゃんだけえ？w」

お酒のにおいを撒き散らし、千鳥足で歩く、頬を赤らめた一人の女性がそこにいた。

ら．．乱菊？

「んーっ．．．飲みすぎたかなあ．．．」

頭をぼりぼりと掻きながら、松本は空を見上げた。

「うおーーーっ、きつねーい（はあと）」

夜空の宝石に見とれてバランスが取れず後ろに倒れていく。

何してんねん!!!

危ないやないかつ!!!

市丸は、無意識に飛び出していた。

「ん???あれ???」

松本は何が何かわからずにいた。

自分を支える何かがそこにある。

「えっ!!!!!!!!!!!!ギッ・・・・・・・・・・・・いつ・・・・市丸たい
ちよーっじゃないですかっ?!」

市丸は松本の肩に手を回し、支えていた。

松本の体から酒気が抜けていくのがわかる。

「何してのん？十番副隊長さん？あぶないで・・・」

何もなかったかのように淡々と語りかける。

「な・・・何してるんですか??!!..こんなとこでっ!!..」

松本は焦りの色が隠せない。

「んー？散歩にきまっとるやん？」

「・・・そうですか。」

まだ肩にある手をじーつと見る。

「あー。ごめんな・・・」

市丸はぱつと手を引く。

「いえ・・・」

松本はうつむく。

「ほな。僕は行くで」

「あつ……。待つて。もう少しだけ一緒に蛭ちゃんと空……。見ません？」

今の松本から出る、精一杯の言葉だった。

「……………少しだけやったらええよ……」

何年ぶり……。いや、何十年ぶりか。

一緒にこうやって座れたのは……………

二人ともしばらくは声も出ず、虫の鳴き声だけが響きわたっていた。

「久しぶりやね。こついつの。」
「そうね。」

二人の脳裏には過去のことフラッシュバックでよみがえる。

「あつれ・・・？」

松本の目から大粒の涙が、自然と溢れ出していた。

「どうしたんっ？乱菊！？」

こついつ場面になれていない市丸は戸惑っていた。

「ギンが・・・い・・・いつの間に居なくなつてて・・・」

あたしはっ・・・・・・・・・・」

こらえきれず泣きじゃくる松本に、市丸の思いもこみ上げる。

どうしていいのかわからなかったが、松本の頭を撫でた。

「ごめんな・・・」

松本にその一言しか言えなかった。

もっと正直に言いたい、言ってしまいたい。

でもそれができない自分が無性に腹立たしかった・・・

しばらくすると、泣きつかれた松本は、お酒も入ってか市丸にもたれかかって眠っていた。

「しゃーないな・・・」

市丸は松本を横抱きに抱いて歩き出したが・・・

「困ったなあ・・・乱菊の部屋しらんわ・・・」

少し考えてみた。

「あつ。あそこでいいか」

人に見つかりと面倒なので、瞬歩で向かった。

「おやすみ。乱菊……」

松本を降ろすと、頭をさつと撫でて出て行った。

帰り道、その手のぬくもりを感じながら……

忘れへんで……このぬくもり……

ギン
・
・
・
・
・
・

どいつたの？

いつもどうしていなくなるの？

若い松本は、ギンのなくなっている草履の場所と外に向かっていく足跡をじっと見ていた。

これは夢???

「ま——っ——も——と——っ——!!!!」

その一言で目が覚めた。

「はいっ！たいちよー！ー！ー！ー！ー！もつとやさしく起こしてくださいよー．．．」

「ここで寝るなとあれほど言ってるだろう!!」

「え？こっはどっ？？あれれ？？？？」

辺りをキョロキョロした。

「執務室だ・・・・・・・・」

日番谷が仁王立ちで見下ろしている・・・

「次ここで寝た氷輪丸の刑だからなっ！」

「すみませんでしたあ。たいちょー。」

言葉には出したものの、心は違う場所にいた。

夢・・・だったのかな・・・？
本当なわけないよね・・・・・・・・

おわり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7622h/>

月夜の宴

2010年10月12日16時11分発行